

# 大災害の連鎖 警戒呼び掛け

1596年9月の地震記録日と活断層



## 16世紀の豊後地震と似る

震源域が、当初の日奈久断層帯から北東の阿蘇地方や大分県、さらには熊本地方の南西側へと中央構造線(MTL)断層帯の延長線

上に拡大している熊本大地震。安土桃山時代の16世紀末に別府湾から四国、近畿へとMTL沿いに大地震が連鎖した慶長の豊後地震や

伏見地震と状況が似ており、研究者は警戒を呼び掛けている。MTLは、西日本を東西に横断する日本最大級の断層帯。地震考古学者の寒川旭さんは「約400年前は、5日間で別府湾から近畿までMTL沿いの

約400年にわたり、大地震が続いた。活断層がどこから動き始め、どこで止まるかは誰にも分からない。今回の熊本地震でも、近い将来、MTL沿いや延長線上のどこで地震が起きてもおかしくない」と話す。

16世紀の大地震は、豊後(大分県)で始まった。豊臣秀吉が天下統一して間もない1596(文禄5)年9月1日午後8時ごろ、別府湾の海底断層が動き、激しい揺れと津波が海岸を襲った。寺社や民家が次々倒壊し、由布院などで山崩れが多発。砂州状の場所にあった国際貿易港「沖の浜」

(大分市)が液状化や地滑りで消滅し、後世に「瓜生島の沈没伝説が生まれた。文献を総合すると、1日の豊後地震は京都市から鹿児島県で記録されたほどの大地震で、4日には最大余震とみられる地震が発生。両日の地震記録地は、MTL沿いにきれいに並ぶ。

さらに5日、近畿で慶長伏見地震が発生し、真の継体天皇陵とされる今城塚古墳(大阪府高槻市)が崩落。秀吉自慢の伏見城(京都市)は全壊し、近くの木津川河床遺跡(京都府八幡市)には大規模な地割れや液状化の跡が残っている。